

「少年の日の思い出」

組

番

考えるレッスン 文脈から「少年」の心情の変化を捉えよう。

課題 次の感情は、それぞれ少年がどの場面で抱いたものだろう。

その箇所を本文から探して——線を引き、下の欄に順番に書きいれよう。

必死さ、満足感、恐れ、あきらめ、恥ずかしさ、勇気、絶望、期待、後悔、怒り、不安、悲しさ、欲望

エーミールがこの不思議なちょうをもっているということを聞くと、僕は、すっかり興奮してしまって、それが見られるときの来るのが待ちきれなくなった。食後、外出ができるようになると、すぐ僕は、中庭を越えて、隣の家の四階へ上がっていった。そこに、例の先生の息子は、小さいながら自分だけの部屋をもっていた。それが、僕にはどのくらいうらやましかったかわからない。途中で、僕は、だれにも会わなかった。上にたどり着いて、部屋の戸をノックしたが、返事がなかった。エーミールはいなかったのだ。ドアのハンドルを回してみると、入り口は開いていることがわかった。

せめて例のちょうを見たいと、僕は中に入った。そしてすぐに、エーミールが収集をしまっている二つの大きな箱を手にとった。どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのちょうはまだ展翅板に載っているかもしれないと思いついた。はたしてそこにあった。とび色のビロードの羽を細長い紙きれではり伸ばされて、クジヤクヤママユは展翅板に留められていた。僕は、その上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを、残らず間近から眺めた。あいにく、あの有名な斑点だけは見られなかった。細長い紙きれの下になっていたのだ。

胸をどきどきさせながら、僕は紙きれを取りのけたいという誘惑に負けて、留め針を抜いた。すると、四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたという、逆らいがたい欲望を感じて、僕は、生まれて初めて盗みを犯した。僕は、ピンをそつと引っぱった。ちょうは、もう乾いていたので、形は崩れなかった。僕は、それをてのひらに載せて、エーミールの部屋から持ち出した。そのとき、さしずめ僕は、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

ちょうを右手に隠して、僕は階段を下りた。そのときだ。下の方からだれか僕の方に上がってくるのが聞こえた。その瞬間に、僕の良心は目覚めた。僕は突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟った。同時に、見つかりはしないか、という恐ろしい不安に襲われて、僕は、本能的に、獲物を隠していた手を上着のポケットに突っこんだ。ゆっくりと僕は歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。上がってきた女中と、びくびくしながらすれ違ってから、僕は胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まった。

すぐに僕は、このちょうをもっていることはできない、もっているはならない、元に返して、できるなら、何事もなかったようにしておかなければならない、と悟った。そこで、人に出くわして見つかりはしないかということに極度に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分の後には、またエーミールの部屋の中に立っていた。僕は、ポケットから手を出し、ちょうを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、僕はもう、どんな不幸が起ったかということを知った。そして、泣かんばかりだった。クジヤクヤママユはつぶれてしまったのだ。前羽が一つと触角が一本、なくなっていた。ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出そうとすると、羽はばらばらになっていて、繕うことなんかもう思いもよらなかった。

盗みをしたという気持ちより、自分がつぶしてしまった、美しい、珍しいちようを見ているほうが、僕の心を苦しめた。微妙なとび色がかった羽の粉が、自分の指にくっついているのを見た。また、ばらばらになった羽がそこに転がっているのを見た。それをすっかり元どおりにすることができたら、僕は、どんな持ち物でも楽しみでも、喜んで投げ出したろう。

悲しい気持ちで、僕は家に帰り、夕方まで、うちの小さい庭の中で腰かけていたが、ついに、一切を母に打ち明ける勇気を起こした。母は驚き悲しんだが、すでに、この告白が、どんな罰をしのぶことより、僕にとつてつらいことだったというのを感じたらしかった。

「おまえは、エーミールのところに行かなければなりません。」と、母はきつぱりと言った。「そして、自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。おまえのもっているものうちから、どれかを埋め合わせにより抜いてもらうように、申し出るのです。そして、許してもらうように頼まなければなりません。」

あの模範少年でなくて、ほかの友達だったら、すぐにそうする気になれただろう。彼が、僕の言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようもしないだろうということを、僕は前もってはつきり感じていた。そのうちに夜になってしまったが、僕は出かける気になれなかった。母は、僕が中庭にいるのを見て、

「今日のうちでなければなりません。さあ、行きなさい。」

と、小声で言った。それで、僕は出かけていき、

「エーミールは？」

と尋ねた。彼は出てきて、すぐに、だれかがクジャクヤママユをだいなしにしてしまった、悪いやつがやったのか、あるいは猫がやったのかわからない、と語った。僕は、そのちようを見せてくれ、と頼んだ。二人は上にながっていった。彼はろうそくをつけた。僕は、だいなしになったちようが展翅板の上に載っているのを見た。エーミールがそれを繕うために努力した跡が認められた。壊れた羽は丹念に広げられ、ぬれた吸い取り紙の上に置かれてあった。しかし、それは直すよしもなかった。触角もやはりなくなっていた。そこで、それは僕がやったのだ、と言い、くわしく話し、説明しようと試みた。

すると、エーミールは、激したり、僕をどなりつけたりなどはしないで、低く「ちえっ。」と舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていたが、それから、

「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」

と言った。

僕は、彼に、僕のおもちやをみんなやる、と言った。それでも、彼は冷淡に構え、依然僕をただ軽蔑的に見つめていたので、僕は、自分のちようの収集を全部やる、と言った。しかし、彼は、

「結構だよ。僕は、君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、君がちようをどんなに取りあつかっているか、ということを見るのができたさ。」

と言った。

その瞬間、僕は、すんでのところであいつのどぶえに飛びかかるところだった。もうどうにもしようがなかった。僕は悪漢だということに決まってしまう、エーミールは、まるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義を盾に、あなどるように僕の前に立っていた。彼はのしりさえしなかった。ただ僕を眺めて、軽蔑していた。

そのとき、初めて僕は、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った。僕は立ち去った。母が根掘り葉掘りきこうとしないで、僕にキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。僕は、「床にお入り。」と言われた。僕にとってはもうおそい時刻だった。だが、その前に、僕は、そつと食堂に行つて、大きなとび色の厚紙の箱を取つてき、それを寝台の上に載せ、やみの中で開いた。そして、ちようを一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶしてしまった。

